

多自然川づくり取組事例

タイトル : 水辺環境と地域の共生に向けて～美々川・ウトナイ湖～		
水系 / 河川名 : 安平川水系 勇払川(ウトナイ湖)、美々川	河川分類 :	その他
河川の流域面積 : 117.7	整備計画流量 :	-m3/s
セグメント :	3	
事業 : 環境整備	事業開始年度 :	平成14年度
目標設定 : 定量的	段階 :	C(モニタリング・評価時)
課題・目的(主な) : 貴重種・特定動植物の保全、ワンド・たまり、池沼の保全・再生・創出		
工法(主な) : 管理ルールの設定、その他		
配慮事項(主な) : 委員会、協議会等の開催		

背景・課題、目標設定

<背景>

二級河川勇払川のウトナイ湖の周囲には原野、湿原等の豊かな自然環境が残されており、水鳥の中継地として1991年にラムサール条約に登録されている。しかし、周辺開発や河川改修によって環境変化がおこり自然が失われつつあったため、平成19年3月に「美々川自然再生計画書」策定され、この計画書に基づき1960年～1970年代の自然環境を目標として、自然環境の再生と保全に関する事業が実施されている。

「美々川自然再生計画書」をもとに、各専門分野の委員による技術検討委員会(2017年名称変更:技術検討懇談会、アクションプログラムワーキング)を実施し、「健全な水辺環境と水循環の回復により多様な生態系の維持」「豊かな自然と共生する地域社会の形成」を目的に「流水環境の復元と保全」「湿地環境の復元と保全」「地域連携」といった取り組みを実施している。

今回は上記のうち、「湿地環境の復元と保全」に焦点を当てウトナイ湖畔における課題に対する取り組みを紹介する。

<課題>

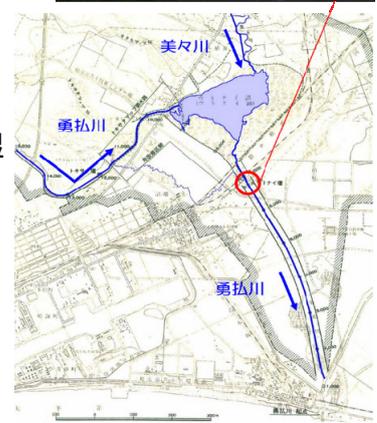
ウトナイ湖は1998年からウトナイ堰によって湖水位を保っているが、湖岸の植生は乾燥化により変化が進んでいる。ハンノキ林が湖岸近くまで拡大し、フェンと呼ばれる(湿原草原)が減少しており、森林性鳥類のシジュウカラ、ハシブトガラが増加傾向に転じ、草原性鳥類であり絶滅危惧種であるシマアオジや準絶滅危惧であるホオアカの減少が危惧されている。

<目標>

現状よりも湖水位の高かった1970年頃の湖水位約2.3mを再現した植生分布シミュレーションを行った結果、フェンの分布は対象地面積の「53%」となる結果となったため、これを目標値としてウトナイ湖水位調整による湿地化検証を行っている。



ウトナイ堰
令和7年(2025年)現在

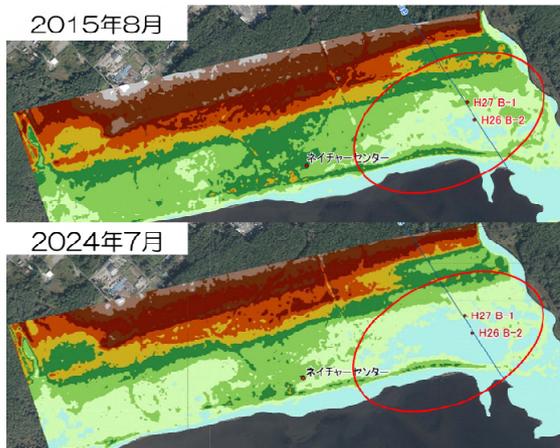


取組内容・対策例

<ウトナイ堰の堰運用による湖水位調整>

ウトナイ堰の堰運用により湖水位を調整し、目標値を達成するため周辺環境変化を注意深く観察しながら段階的に湖水位の引き上げを行い、2016年～2019年は2.1m、2020年には2.15m、2021年以降から現在までは2.2mを目安に湖水位を設定している。

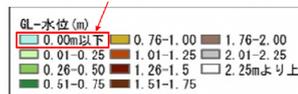
ハンノキの生長を抑制し、フェンと呼ばれるタイプの湿生草原が成立するために、植物の生育期間(春期～夏期)の湖内水位を高く維持できるよう調整した。湖水位の上昇量や期別の設定は、植生回復の状況を考慮しながら段階的に見直しを図っている。



北西岸冠水状況
2015年-2024年比較

冠水範囲の拡大を確認

GL-水位が0m以下の範囲が冠水範囲

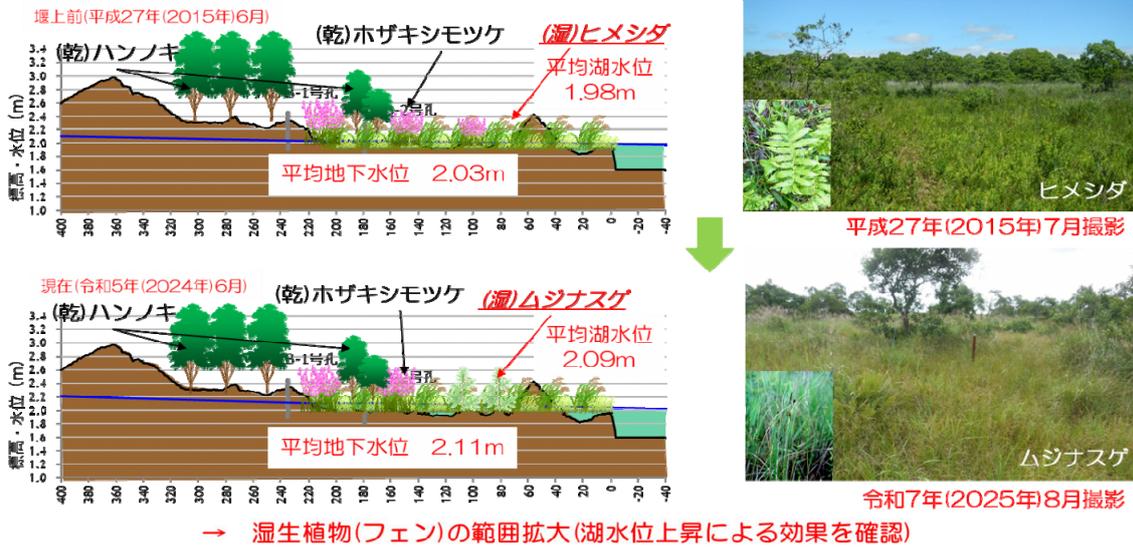


モニタリング結果、アピールポイント、今後の対応方針

<モニタリング結果>

○植生変化

冠水範囲が拡大した結果、フェンの構成種であるムジナスゲの増加が確認され、植生が水位の高い環境に適応した種に変化している傾向がみられた。



○ハンノキの生長

湖水位の上昇をうけた地下水位の上昇により、ハンノキの生長量に減少傾向が見られた。



→ ハンノキは枯れないが、生長が鈍化している！

<アピールポイント、今後の対応方針>

湖水位の上昇によりウトナイ湖北岸の低地部はフェンの成立しやすい水位となり、草原部はムジナスゲ等フェンの構成種が増加し、ハンノキ林は生長が鈍化している。このため、確実に設定した目標にむかっていると評価できる。

変化は緩やかであり明瞭な景観の変化は少ないが、急激な変化は生態系に及ぼす影響が大きく、意図しない変化の際に回復が困難となる恐れがあることから、効果検証のためモニタリングを継続する。

備考

美々川やラムサール条約登録湿地であるウトナイ湖の貴重な自然環境保全の取組みは、周辺地域の理解が不可欠である。近隣中学校の出前授業や、HPによる情報発信を行い、自然環境保全の取組みについて周辺地域住民を対象とした普及啓発活動を実施している。